

大学における海外研修のあり方に関する一考察

山崎 大介

(工学部教養教育センター)

要約:

この論文は、富山県立大学で実際に行われている「海外特別研修(英国・ロンドン)」を参考として、高等教育機関における海外研修のあり方について考察することを主たる目的としている。具体的には、(1) 学生の満足度をどのように高めるか; (2) 本来の目的をどのように達成するか; (3) 安全と安心をどのように確保するか、という3つの質問に回答することを試みる。結論として、(1) については、行き先や研修目的、観光を含む異文化体験等の位置付けが学生の満足度に影響する可能性があるとしている。また、(2) に関しては、事前研修、本番(現地プログラム)、事後研修という段階ごとに論考し、出発前は学業面の準備と人間関係の構築、現地では学習指導や観光面での要望等への対応、帰国後は目標言語の使用や国際交流の機会提供などによるモチベーションの維持が本来の目的達成に必要であろうと考えている。そして、(3) は、可能な限りの準備や信頼できる旅行会社の選定などが、安全や安心を確保する上で重要な要素となるだろう。いずれにしても、学生が、「参加した甲斐があった」と心から思えるような、よく練られた留学プログラムが活発に行われることを期待する。

キーワード: 海外研修、大学、学生の満足度、本来の目的、安全と安心

1. はじめに

「グローバル人材育成」という言葉がこの世の中で流行り始めてから久しい感じがするのは筆者だけだろうか。この言葉が、世間で頻繁に使われるようになってから、多くの大学等で「英語教育」や「国際交流」などにより力を注ぎ、以前にも増して、学部や学科の名前を「グローバル」や「国際」というキーワードを含めたものにする機関が増加したという印象さえある。そうした中、「海外留学制度」を新設したり整備したりすることにより、多少なりとも抽象的な印象を抱きかねない「グローバル人材育成」という言葉を体現しようとする高等教育機関等が点在してきたと思われる。

一方で、「若者の内向き志向」や「留学離れ」などについての指摘があるだけでなく、高騰する海外研修への参加費用を問題視する声さえも上がっているようである。大学によっては、受け入れる機関などとの間で定められた「最少催行人員」に達しないということで、その年度の留学プログラムが中止になるという事例も実際に発生しているかもしれない。また、参加学生が所属する教育機関の教職員による関与等が難しいような研修も存在する可能性があり、海外研修のあり方などについて検討する必要があるかもしれない。

では、大学における海外研修とは、どのように実施すべきなのだろうか。そこで、具体的には、以下の質問への回答を試みる:(1) 学生の満足度をどのように高めるか;

(2) 本来の目的をどのように達成するか;(3) 安全と安心をどのように確保するか。その際、筆者が勤務する大学で行われている研修での事例等を参考にしている。

なお、本稿における「海外研修」とは、主として、大学等の高等教育機関において、春休みや夏休み期間などを利用して実施される、「1か月未満」の短期留学プログラムを言及することとする。

2. 富山県立大学「海外特別研修」の概要

筆者は、富山県立大学(以下、「本学」という。)への赴任後より、「山崎プロジェクト」に継続して取り組んでいる。このプロジェクトでは、地域ボランティアとしての児童英語教室や英語スピーチコンテストなど、さまざまなものを手掛けている。そうした中で、2017年度より、毎年、「海外特別研修(英国・ロンドン)」(以下、「海外特別研修」という。)を実施している(表1を参照)。この研修は、本学学生が大学卒業後に広い視野をもって、それぞれの分野へ羽ばたいていけるような人材の育成を目指しており、先方の大学や旅行会社との交渉等を含め、筆者が企画から、運営、実施などを全般的に行っているものである。研修期間中は、本学学生がロンドン大学ユニヴァーシティ・カレッジ・ロンドン(UCL)校で約100年も続く伝統のある「夏季英語音声学セミナー」へ参加をし、実践的な英語コミュニケーション能力の習得を目指して、総合的に英語の音声などを学習する。

本学における「海外特別研修」の主な内容としては、(1) 英語音声学セミナーへの参加；(2) 英国文化及び「マチナカ」英語の体験など；(3) その他（仲間との交流、パーティーへの参加、特別課題など）となっている。

なお、「海外特別研修」には、多くの学生より参加希望が出される傾向にあるのだが、大学側や筆者が所属する教養教育センターのセンター長による指示などもあり、参加人数の制限等が基本的には設けられている。

表1 本学における「海外特別研修」の実施状況

回次	研修期間	日数	参加人数	
第1回	2017年8月11日 ～8月28日	18日間	学生	3名
			教員	1名
第2回	2018年8月10日 ～8月27日	18日間	学生	8名
			教員	1名
			添乗員	1名
第3回	2019年8月15日 ～9月2日	19日間	学生	4名
			教員	1名

3. 学生の満足度をどのように高めるか

少子高齢化社会において学生獲得が厳しい状況になりつつある中で、在学生に対してより満足度の高い取り組みを実行し、ひいては受験生に「選ばれる大学」になることを経営戦略として掲げている高等教育機関が増えてきているのではないだろうか。そうした中、大学の中期目標等に何かしらの国際戦略を掲げ、海外との交流を活性化させるだけでなく、短期の海外研修を含む留学制度などの充実を図る動きが見られる。

ここで特筆すべきこととして、大学によっては年間で「～名」の学生を海外に送り込むというような、具体的な数値目標を設定している機関があるということである。一般的に、長期留学や交換留学などについては、参加人数が限定されたり、希望者が少なかったりすることがあるだろう。一方で、短期間の留学プログラム（語学研修など）は、特に選考などが行われなかったり、基本的には費用さえ支払えば誰でも参加できたりするような仕組みとなっているところもあると思われ、そうした場合は、よりたくさんの方の参加人数が見込める。そのため、できるだけ多くの学生に参加してもらうためにパンフレットなどを作成して宣伝したり、募集説明会や留学報告会などを開催したりすることによって、海外研修等への参加を広く呼びかける動きが各大学等で見られるかもしれない。ただし、機械的に募集したとしても簡単に参加者が集まるとは限らず、何か魅力のある研修内容にしなければ、学生の心には響かないであろう。

では、研修が学生にとって魅力的で、満足できるような

ものにするためには、どのような点に配慮をしなければならないのであろうか。本章では、特に、大学において新規で海外研修を実施する際に、学生の満足度に多少なりとも影響するだろうと思われる3つの項目について論じることとする。

3.1 行き先の選定

海外へ学生を送り出す制度をサービスと捉えるならば、顧客となる学生が気にするのは、やはり「行き先」だと思われる。通常、日本における旅行会社の店頭には、多くのパンフレットなどが陳列されている。そこで、顧客はどのような視点で、どのパンフレットを手にするのかを考えてみると、当然、旅行の「代金」という金銭的な観点や、観光やハネムーンなどの「目的」という観点を考慮しながら選ぶこともあるだろう。しかし、ほとんどの場合、おそらく行きたいと思う「場所」という要素が優先的に働いているのではないだろうか。

では、海外研修ではどこに行くべきなのか。一番望ましいのは、参加を希望する学生へどこに行きたいのかを尋ね、実に行きたいという場所を設定するというのが良いのかもしれない。しかし、大学の研修として実施することになると、教育や安全管理上のことだけでなく、事故やトラブルが発生した際の責任問題を含め、関連する準備のことなどさまざまな「壁」や制約、条件等があり、すぐに行動することは極めて難しいのかもしれない。そこで、学生の海外志向に関する調査などを予め実施して、統計的にある程度の傾向をつかんでおくことは、将来的に「行き先」を選定する上で参考になるとと思われる。

山内 (2015) によると、「短期海外研修希望地」に関する学生へのアンケート調査の結果として、「希望が多い順に、イギリス (21%)、カナダ (20%)、アメリカ (19%)、オーストラリア (13%)、韓国 (9%)、中国 (7%)、その他の国 (11%) であった」(p.4) と報告している。

参考として、筆者が大学において英語科目等を担当する教員として働く中で感じたことではあるが、「ロンドン (イギリス)」、「パリ (フランス)」、「ニューヨーク (アメリカ)」、「イタリア」、「ヨーロッパ」、「韓国」、「オーストラリア」などが、学生等が行ってみたいと思う場所として比較的に名前が挙がってくるのではないかとこのような印象がある。

なお、筆者が2018年度の「海外特別研修」について実施するかどうかを検討していた際に、学生の金銭的な負担を軽減するなどの理由から、行き先を「英国・ロンドン」ではなく、新たに「オーストラリア」という選択肢を設けることについて提案したところ、学生からは「ロンドン」以

外の選択肢はないとして、「ロンドン」での研修実施を懇願されたという経緯がある。

やはり、「行き先」というのは最も重要な旅の要素のひとつであり、その旅へ行くかどうかを決定するほどの重みがあるのではないだろうか。それゆえに、研修への参加者が集まるかどうかを含め、学生の満足度にも影響することが大いに考えられるため、「行き先」は慎重に決定しなければならないと思われる。ただし、海外の大学との提携関係や安全管理上の問題など、行き先の選定に影響を及ぼす可能性のある要因が存在することを留意しておく必要がある。

3.2 主たる研修目的の設定

単なる海外旅行と異なるのが、留学であり、海外研修なのかもしれない。高等教育機関である大学が行う海外研修であれば、語学や学術的な内容の授業を含む「学業」的な要素が主たる目的として掲げられていることが多く、研修への参加により「英語力を伸ばすことができる」、もしくは「専門的な知識を獲得することができる」というそれなりの効果が求められるところかもしれない。

しかし、現状はどのような状況であろうか。実際は、1か月未満の短期留学プログラムに参加した学生などの見解として、研修全体としては「楽しい」というような前向きな声を多く聞く一方で、「語学力は期待していたほど伸びない」とあるとか、現地ではただ単に「英会話ごっこ」のようなものしかしていないので、本気で英語力を伸ばしたい人には「物足りない」というような否定的なコメントを耳にすることがある。また、近年、時折聞くこととして、そうしたプログラムの中には、「ビジネスライク」になっているものもあり、教育効果や学習効果などは二の次になっているのではないかと、特に教育の質的な観点で多少なりとも懐疑的な見方をされることもあるようである。

こうした実情を鑑みると、海外研修プログラムを実施する大学が、自分たちが理想とするやり方で、教育効果や学習効果が高いものを作り上げていくのが本来的には良いのかもしれないが、大学という組織の枠組みの中で、やはりさまざまな制約や条件等があり、そんなに簡単ではない。では、海外研修において、どのような目的を設定して、どのような内容のものにするべきなのであろうか。

大西 (2018) によれば、「つまり必要なのは、国内でも実施出来ることと、海外へ留学しなければ実現困難なこととの可能な限り明確な線引きではないだろうか」(p.15) というので、ある程度の金額を支払ってわざわざ海外にまで行くことの意義というものを改めて考えさせられる。それ以外に、大西 (2018) は、「練りに練られた留学プログラム」(p.21) を開発するには「ヒト・モノ・カネ・時間と多く

の資源が必要であろう」(p.21) として、「留学プログラムは自前に拘らない」(p.21) ということも述べている。

筆者が実施する「海外特別研修」では、英国のロンドン大学 UCL 校で約 100 年の伝統がある「夏季英語音声学セミナー」への参加を研修の主たる目的のひとつとして掲げている。その理由は、主にふたつある。ひとつ目として、「音声学」を専門分野とする筆者は、このセミナーを主催する大学の関係者と、研究を含め、今までいろいろと交流等をさせていただいているため、実施しやすいなどの利点があるからである。ふたつ目は、筆者が英語科目などを担当する中で気付いたこととして、英語学習者は、「英語の発音」に強い興味や関心をもっている可能性があり、「発音を良くしたい」と思っていることが多いからである。このセミナーは、個々の音に関する発音方法のみならず、リズムやイントネーションといった英語学習者がとても苦手とする一方でかなりの興味をもっているだろう音声的な観点を詳しく学ぶことができ、発音について鍛えるだけでなく、リスニングやコミュニケーションに関する能力などを向上させることにも適していると思われる。

2017 年、2018 年、2019 年の夏に実施した本学の「海外特別研修」では、幸いにも、学生が勉強したいと思う内容を扱う研修目的となっており、実際に音声研究などが盛んに行われているロンドン大学 UCL 校で、一流の音声学者等による指導を受けることができる内容の濃いプログラムに参加できたことは、学生にとって貴重な体験になったと思われる。

3.3 現地での観光や異文化体験等の位置付け

海外に行くモチベーションのひとつには、「英語」などの「語学力」を伸ばすということを挙げる海外留学希望者がいると思われるが、それだけではなく、観光や異文化体験等の「学業」というよりかはむしろ「遊び」的な要素についても期待する参加者は多く、海外研修の類には、必ずと言っていいほどに盛り込まれているだろう。ただし、主催や運営する側の判断だけにより、ただ闇雲に観光地をリストに並べてそうした場所を訪れれば良いというわけではなく、なるべく参加する学生の意向に沿えるような努力は必要なのかもしれない。

本学の「海外特別研修」では、学生が研修への「参加希望申請書」等の応募書類を提出した直後に参加者全員で集まり、観光地などに関する希望について質問をしている。基本的には、観光ガイドブックに載っているような場所を選択する傾向が見られるものの、行きたい場所がたくさんある場合には、どこを優先するのかということもある程度決めなければならないだろう。もちろん、参加人数が多く

なればなるほど、希望する場所の数は当然のことながら増えてくるかもしれない。いずれにしても、日程的なこと、教育や安全管理上のこと、金銭的なことなどにおいて何の不都合もないのであれば、学生からの望みをできる限り叶える方が満足度は当然高くなる。ただし、大学側や所属長等に相談した上で判断を仰ぎ、許可などを得る必要がある案件も出てくることもあり、そうした場合においても、しっかりと対応が求められる。

ここでポイントとなるのは、研修期間の限られた時間の中で、いかに上手に組み合わせ、円滑にそうした観光地を巡るかということである。大学で行う研修ということで、前述したような「学業」的な要素を主たる目的として優先的に取り扱う関係で、「観光」等については、週末及び平日の授業が終わった後の「隙間」時間（例として、平日の場合、午後3時頃から寮での夕食前までの約4時間）などに限定されてしまう傾向があるだろう。約2~3週間の短期研修であると「観光」の目玉（例えば、英国・ロンドンにおけるバッキンガム宮殿での「衛兵交代式」のように、開催日時や場所などが限定されていて、多くの観光客が集結するような有名な観光スポットなど）となるようなものは、残念ながらそれほど多くは予定に入れられないと思われる。

また、学生が希望する観光地の中には、予約が必要なものや、日本でチケット等を購入しておいた方が望ましいものなどがある。例えば、本学の2018年度の研修における「映画のスタジオツアー」、「ミュージカル」、「プロオーケストラのコンサート」の3点については、渡英の2か月以上前に予約及びチケット等を購入した。同様に、2019年度の研修においても、参加学生より特に希望の多かった「ミュージカル」や「アフタヌーン・ティー」、「映画のスタジオツアー」についても、価格や場所、開催日時などについてしっかりと調査した上で、担当する旅行会社を通じて渡航前に予約及びチケット等を購入した。実際、事前に予約及びチケット等を購入したものについては、希望観光地リストの中でも特に入場券の確保等が難しく、すぐに満席になってしまうものであり、学生を落胆させないためにも、予約をしてチケット等を予め購入しておいた方が得策だと思われる。付け加えて、座席指定が必要なイベントについては、参加するメンバーが客席で一列に並んで座れるようにすることによって、それぞれの座る位置が離れ離れにならないように、引率者の目がしっかりと行き届くように、安全管理等に関する配慮もした。

このように、現地での観光や異文化体験等についても、単なる「おまけ」としてではなく重要な研修の一部として扱い、事前にできるだけ準備をすることも、学生の満足度につながると考えられる。

4. 本来の目的をどのように達成するか

「行き先」を選定し、研修の主たる目的となる「学業」面と、異文化体験等を含む「観光」面に関する要素を決定しても、研修終了後のことまでを考え、「点」ではなく「線」として、組織的に全体の運営を行わなければ、単なる「観光旅行」とほとんど変わらないものになってしまう可能性がある。

そこで、研修の本来の目的を達成するために、「事前」、「本番」、「事後」という3つの段階に分けて、一連の流れの中で、研修全体をどのように運営していくかについて、以下では論じることとする。

4.1 事前研修

海外研修を実施する上で、「事前研修」を実施している大学は、極めて多いのではないかと推測する。ただし、その内容については多岐にわたると考えられる。事前研修を単位化してしっかりと授業等を行っている大学もあれば、大学事務局の職員などが関係書類の説明だけをするだけで終わるといったところもあるだろう。

本学の「海外特別研修」に関しては、筆者が事前研修（現時点において単位化はされていない）を担当した。研修を開始した2017年度については、多少、不定期に近い形での開催であったが、2018年度からは、事前研修の予定表を最初に配布した上で行った。時間としては、週2回（月曜日と金曜日の昼休み）でそれぞれ約40分ずつ、これを渡航前における2か月以上の期間にわたりほぼ毎週実施するという計画であり、2018年度及び2019年度において、いずれもおおむね予定通り実施できたのではないかとと言える。

以下では、事前研修において必要と思われる3つの項目について述べることにする。

4.1.1 目標言語（英語）の学習

一般的に、「海外に行けば英語が話せるようになる」という考えが大勢を占めているような印象がある。この考えは、決して否定されるものではない。実際に、海外（特に英語圏）に滞在したことで、英語が使いこなせるようになったということもあるだろう。一方で、これは神話的であり、海外に行ったからといって英語ができるようになるとは限らないという主張もあるのが実情である。それぞれが置かれる環境等によって異なるので絶対ではないのだが、筆者としては、英語が話せるようになるかどうかは、現地ですりかかすのではなく、海外へ行く前の段階においていかに準備するかどうかが鍵なのではないかと考えている。

ここで、負の連鎖になりうる一例を示すこととする。基本的には、大学の海外研修参加者は、「英語力を向上させる」ことを希望していることが多い。ただし、多数の日本人が同行する海外研修などに参加すると、日本人同士で固まってしまい、日本語ばかりを話す環境ができてしまう傾向が見られることもある。さらに、現地ではSNS等で日本にいる家族や友人たちと日本語でやりとりしてしまうなどで、次第に英語を使うことが面倒になってくるという結末である。つまり、英語力の向上を図りたいと思っても、海外ではほぼ英語を使わずに、日本語を多用した生活をするのであれば、日本にいるときとほぼ変わらないように思われる。

そこで、現地で英語のトレーニングをするのではなく、日本にいるときから英語を鍛えておくことが必要であると考える。それゆえに、渡航した際、日本語を使う前に、まずは今まで勉強してきた英語を試してみようという気持ちになったり、現地で英語を使う状況に直面したときに、どうしていいかわからないために、結局「黙る」もしくは「ついつい日本語を使ってしまう」というようなことを多少なりとも避けたりすることができるのではないだろうか。いずれにしても、英語が自信をもって使えるように、気持的な面でも変化が起きるように、渡航前からトレーニングをしておくことが重要であると考えられる。

具体的な方法として、ひとつは筆者が20年以上前に着想し、いろいろと実践等をしている「山崎メソッド」を紹介している。これには、音声の速度を変化させることによって負荷の度合いを変えていく特殊な音声トレーニング法が含まれており、主として、音韻認識能力やリスニング力、発音力などを向上させることが期待されるものである。特に、音の速さを変化させることにより、耳に音の速度的な錯覚を起こすことが特徴である。参考までに、野球での例であるが、球速が140キロのボール（球種はストレート）をいきなり打撃練習するよりも、90キロくらいから始め、100キロ、110キロ、120キロ、130キロ、そして140キロという流れで徐々に速度を上げ、目を慣らしていった方がより確実にボールの芯をとらえて打ちやすくなるだろう。当然、個人差などがあり、人によっては、こうしたやり方では結果が異なることもあるので、一般化はできないかもしれないが、経験的には、段階的に速度を上げていき、球速140キロのボールを打撃練習した直後に球速100キロへ切り替えると、不思議なことに、ボールが少し遅く感じてしまい、打席で多少余裕をもってボールを見ることができるようになる。こうした経験を基に、耳に音の速度的な錯覚を起こし、通常より速い音声（基本的には1.4倍までの速さで練習する）が聞こえるようになれば、ナチュラルスピード（1.0倍）のものが多少ゆっくり聞こえるなどの効果

が得られ、速いと思われる音声へ対応しやすくなるのではないかということで、こうしたやり方を英語のトレーニング等において適宜活用している。なお、「音」のトレーニングだけでなく、「内容」のトレーニングなどについても行う必要があるだろうと思われる。

もうひとつは、留学した際に使えるような英会話に関するハンドブックなどにより、実際にここではこのように英語を使うという状況をイメージしながら、より頻度の高いと思われる場面などを想定して英会話の練習を実践的に行うことである。こうした練習を行っておくことにより、多少なりとも心の余裕ができるように思われる。

なお、ロンドン大学 UCL 校で行われている「夏季英語音声学セミナー」の参加資格は「18歳以上」（訳は引用者による）となっている。付け加えて、「このコースは、英語の母語話者及び非母語話者を対象とするものである。英語の非母語話者である参加者は、実用的に使える十分な英語の知識を有している必要がある。証明するものを提出する必要はないが、IELTS の 6.5 以上、もしくは TOEFL (IBT) の 92 以上のレベルであることが望ましい」（訳は引用者による）ということがこのセミナーのインターネット上にあるウェブページ (UCL Psychology and Language Sciences, 2019) にて明示されている（原文は英語）。

日本英語検定協会 (n.d.) によると、IELTS の成績評価において9点満点中の「6点」とは、「有能なユーザー」とされ、「不正確さ、不適切さ、および誤解がいくらか見られるものの、概して効果的に英語を駆使する能力を有している。特に、慣れた状況においては、かなり複雑な言語を使いこなすことができる」とある。

また、TOEFL (IBT) について一例を挙げると、MIT Admissions (n.d.) によれば、マサチューセッツ工科大学の学部入学時に必要とされる最低ラインとしては「90点」となっている（原文は英語、訳は引用者による）。

これらのことを鑑みると、実際、日本の平均的な学部1年次生もしくは2年次生等の中には、前述のロンドン大学より求められている「英語力」が、多少「高い」のではないかと不安などを感じる学生がいるかもしれない。

いずれにしても、現地での研修を意味のあるものにするため、事前にある程度英語を勉強しておかなければならないのではないだろうか。

4.1.2 専門的な内容の予習

この世の中において、一概に「研修」と言っても、そこで扱われる内容は多種多様である。簡単なレベルであればそれほど抵抗なく受講できるかと思われるが、専門的な内容のことに関する研修の場合、ある程度の準備をしておか

なければ、専門用語に苦しめられ、結局は内容を理解する前に、辞書に載っているかどうか定かではないような難しい語彙などを調べることで精一杯の状況に陥ることになるだろう。

なお、2017年、2018年、2019年の各年度において、本学工学部（2019年度については同年4月に新設された看護学部の1年次生を含む）の学生が参加したロンドン大学の「夏季英語音声学セミナー」は、音声学的なことを中心に専門的な内容も扱っている。つまり、参加者にとっては「英語の壁」のみならず、「専門的な内容の壁」にも直面する可能性がある。したがって、できる限りそうした壁を低くして、研修での授業についていけるような状態になっていることが望ましい。

筆者は、このセミナーに何度か参加したことがあり、内容的にもどのようなことが授業で話されるのかを多少なりとも予測できる部分があったため、事前学習等において、鍵となる部分について一部ではあるが説明などをした。その際、専門用語についても簡単に解説し、研修に参加する学生に必要な最低限の要点を理解してもらえるように努めた。当然、専門分野がまったく異なる学生を対象とする場合はそれなりの配慮が必要であろう。

実際、出発前の段階から、現地で扱う専門の内容を知っておくことで、「英語がわからない」ということと、「専門的な内容がわからない」ということの、二重のショックを緩和することができるだけでなく、事前に少しでも知っているという安心感から自信が生まれ、現地でセミナーを受講している際に、担当講師の方に対してより専門的な深い内容の質問をするというようなことが期待できるかもしれない。

4.1.3 人間関係の構築

大学等で行う短期の海外研修と言っても、約2～3週間の期間になることが多い。加えて、基本は、同じ大学の仲間ではあるが、家族ではないと思われる。同行するメンバーが全て友人や知り合いということも稀であろう。研修は「個人旅行」ではなく「団体旅行」という認識で、和を乱さずに「集団」での行動が求められる傾向にある。また、仮定の話になるかもしれないが、海外生活が初めてというだけでなく、日本の中学校や高等学校における一般的な修学旅行の日数（3日～1週間程度であろうか）を超える期間を、一人暮らしの経験がなく、初めて実家を離れて過ごすという学生等にとっては、特に、「ホームシック」などの心配をするケースもあり、予め周りの仲間との良好な関係を作っておくことも重要だと思われる。では、一体どのようにすれば良いのだろうか。

例として、本学で2018年度に実施した「海外特別研修」では、事前研修のちょうど中間に差し掛かるくらいの時期に、大学から少し離れた場所にある公共施設のバーベキュー場において「懇親会」を実施した。ただ一緒に食事をしたくらいで何かが劇的に変わるのかというような批判を浴びるかもしれないが、それでも、主観的な判断ではあるが、メンバー同士の会話量はそれ以前よりも明らかに増えたと実感できる部分があり、それまであまり交流していなかったメンバーが、それぞれ円滑にコミュニケーションをとるようになり、腹を割って話せるような間柄になってきたと感じさせる光景を、それ以降幾度となく見かけるようになった。また、メンバーの取りまとめ役になっている「リーダー」の学生がより自分の責務を自覚して積極的に行動するようになった。こうしたことから、事前研修のできるだけ早い時期に、メンバー同士が打ち解けて語り合える場や機会を意図的に設けることも、海外研修を成就させるひとつの鍵になるのではないかと考える。

4.2 本番（現地プログラム）

海外研修の「本番」にあたるのが現地プログラムであり、この部分がしっかりと機能するように運営しなければ、大学の「研修」として行う意味はないのではないかとと思われる。そこで、事前研修等で準備してきたことを生かしつつ、それぞれの参加学生が海外研修の主たる目的として掲げられたものを達成できるように、運営する側が最大限配慮すべきことについて、「学業」、「観光」、「語学」という3つの側面から考えることとする。

4.2.1 学業面での支援

本学学生が参加した「夏季英語音声学セミナー」は、ロンドン大学が主催するプログラムであり、筆者が所属する大学で行う自前のものではない。そうした事情はあるものの、こちら側としては「丸投げ」にして何もしないで良いということではないだろう。たとえ事前研修等で多少は準備をしていたとしても、ひとたび現地に行けば、参加学生はそこで実際に話されている英語の発話速度に驚き、何を言っているのかよくわからないという状況になるかもしれない。そのため、「英語の壁」と「専門的な内容の壁」の両方にぶつかってしまう可能性があることを想定した上で、何かしらの支援等について考えておく必要があると思われる。以下では、本学における「海外特別研修」を実施した際の事例をふたつ紹介することとする。

まず、2017年度の場合、現地でのセミナー2日目（ロンドンに到着してから4日目）が終わった後のことであるが、

参加学生は、講義において講師の方が話している内容の理解やゼミの時間における発表にとっても苦勞しているようであった。そのため、メンバーと話し合い、翌日の放課後に参加学生全員で集まり、筆者が授業の予習と復習を含め、勉強会並びに相談等の時間を設けた。幸いなことに、それ以降、以前よりも積極的になり、セミナーを楽しんでいるように見受けられた。また、参加学生が一緒になって、授業の復習として発音練習をするなど、周りで支え合い、さらに良い雰囲気になったと感じられた。

次に、2018年度については、前年度と異なる新しい大学寮に滞在することになった。その大学寮には、「夏季英語音声学セミナー」に参加する日本の他大学の学生及び引率教員も滞在しており、ほぼ毎日午後9時から補習授業を約1時間実施しているとのことだった。補習を担当されている引率教員の方から補習への誘いのお話をいただいたので、本学学生の中で希望者が参加させていただいた。ここでは、講師となる先生が、翌日のセミナーにおける授業の予習を中心に日本語で丁寧に解説をされていたので、参加している学生にとって有益なものになったことと思われる。

いずれにしても、「文法」ではなく「発音」という、今まで日本の英語教育ではそれほど力点が置かれてこなかっただろうと思われる内容を扱っているのが、学生の関心度も非常に高い。それゆえに、授業の内容がわかればとても楽しいと感じられるので、できるだけセミナーの内容についていけるように支援等をすることが必要であり、こうした運営する側の尽力というのは、本来の目的を達成するための重要な鍵のひとつになるだろう。

4.2.2 観光面における要望等への対応

本学の「海外特別研修」では、大学の「研修」ということで、学業的な要素を強調している傾向にあるが、実際の参加者や保護者等の意見や希望として、日本とは違う海外の文化を直接体験して、視野を広げ、人間的にさらに成長することを期待している部分がある。特に、渡英した際には、観光名所などをしっかりと見学することを強く望んでいるように感じられた。確かに、学業的な要素を中心に研修を構成しているのだが、「せっかく～に行くならば、～が見たい、～に行きたい、～を体験したい」というような要望が出てくるのは極めて自然なことであり、海外の文化を知ることによって日本文化との比較もでき、異文化理解が促進されるものと考えられる。そのため、本学の「海外特別研修」では、英国文化の体験等を含む「観光」についても、研修の重要な柱のひとつに据えている。

そこで、前述したように、本学の研修では、参加学生へ訪れたい観光地に関する希望調査を行っており、それらを

できる限り叶える努力をしている。ここでポイントとなるのは、「効率よく」観光地を巡るということである。観光に使える時間は相当限られている中で、ある程度の綿密な計画の下に実行しないと、貴重な時間を無駄にすることになり、希望通りにいかなくなる可能性がある。

本学の事例を参考にして、4つの注意点を以下に紹介することとする：(1) 最も有名な観光地等は現地へ到着した翌日などに必ず行く；(2) 渡航前に予約が必要な人気の「イベント」などは研修日程の前半における週末などに入れる；(3) 渡航後に予約をするものについては研修日程の中盤に入れる；(4) 研修日程の最後は予備日のような扱いとして行事等をあまり詰め込まない。

(1) について、ロンドン場合はビッグ・ベンや中心部の繁華街などであり、そうした有名な場所へ行くことによって、日本を離れて英国・ロンドンによろやく来ることができたという達成感や、前から行きたかった場所にやってくることで良かったという安心感などを抱くだろう。

(2) に関して、大学でのセミナーがひとたび始めると、予習や復習、宿題などの課題があり、それらに集中しなくてはならないので、観光どころではないという雰囲気が漂ってしまう。そのため、セミナー開始前の週末もしくはセミナーが開始されてから最初の週末などに、人気の「イベント」などを入れることが望ましいと考える。本学の場合は、ロンドンへ到着した翌日の夜にミュージカルを入れたり、できる限り早い日程で映画のスタジオツアーへ参加したりすることによって、参加学生の希望が叶うようにしている。

(3) については、2018年度に実施した際、現地への到着以降に「ローストビーフを食べたい」という要望が複数出てきたため、あるレストランにて食事をするようになった。空き時間を見つけて予約を行い、研修中盤の日曜日に参加者全員でその店を訪れた。翌日から始まるセミナーの後半部分に向けて、伝統的なローストビーフに舌鼓を打ち、十二分に英気を養うことができたようである。

(4) は、帰国する前日などを指しており、基本的には、参加学生が家族や友人などにお土産を購入する時間を確保するようにしている。実際、ビスケットやチョコレートなどの食料品については、帰国の前日にたくさん購入する傾向が見られるため、ある程度の時間を自由に使えるようにしておくことが必要であると思われる。また、2019年度に実施した際は、「最後にミュージカルをもう一度みたい」という要望が参加学生からあり、柔軟に対応したという経緯がある。やはり、帰国前には、いろいろと要望が多くなるため、最後の最後まで予断を許さない状況は続くと思われる。

4.2.3 語学面での追加指導

本論ですでに述べているが、海外に行くモチベーションのひとつは「英語」などの「語学力」を高めることであると思われる。ただし、一般的に行われている短期間の海外研修へ参加するだけで、「英語がぺらぺらに話せるようになりたい」というレベルの希望や期待などを叶えることは至難の業なのかもしれない。

それでも、何かしらの希望や期待などがあるのであれば、それを叶える努力をする必要があるのではないかと考えており、2018年度に行われた本学の「海外特別研修」において、ある試みを実施した。それは、『マチナカ』英語」という、英語のコミュニケーション能力をさらに高める独自の企画であり、希望する学生が、ロンドン市内で実践的に英語を使う課題等に挑戦した。

概要として、参加メンバーからいくつかの希望等を聞き、それにあわせて、街中において、英語教員でもある筆者が語学指導などを行い、その目的地となる場所でそれぞれのメンバーが個別に英語を使って任務等を遂行した。一部を具体的に紹介すると、例えば、学生のひとりが家族へのプレゼントを買いたいという希望があったので、それほど混雑していないおしゃれな感じの大きな雑貨店に行き、筆者のワンポイントレッスン等に基づいて英語で店員の方に話しかけ、いろいろと相談をした後に、目標を達成するものである。ここで気を付けなければならないのは、相手がお店であるということで、業務等の邪魔にならないように最大限の礼儀と節度をもって、配慮して行わなければならないということである。

この取り組みについて、最初から毎回休むことなく参加したのは2名であり、とても評判が良いものとなった。加えて、スピーチコンテストなどの研修後に行った活動等においても努力を怠らず、結果を残した。いずれにしても、習ったものをすぐに生かす、そして現地で実際に使ってみるという体験が英語コミュニケーション能力等を向上させることにつながっているのではないかと推測している。

4.3 事後研修

本学の「海外特別研修」は、夏休み期間中に実施するため、英国から帰国後は1か月ほど後期の授業が始まるまでに時間がある。参加学生には、研修に関する感想等の課題があり、提出されたものを読むとそれぞれにとって有意義な体験であったことがうかがわれた。実際、英国への滞在中、事件や事故等に巻き込まれることもなく、無事に帰国できており、全体的には、研修として一定の成果があったのではないかとと思われる。しかし、それだけではなく、約

2〜3週間の英国滞在でしっかりと身に付けたものを、継続して次に生かせる機会をいくつか設けた。

4.3.1 英語スピーチコンテストでの発表

本学では、毎年10月に「富山県立大学学長杯争奪 英語スピーチコンテスト」を実施しており、例として、2019年度は第4回の大会であった。このコンテストは、本学の「英語教育改革ディレクター」を務める筆者が企画して始めたものである。大学近くにある公共のコンサートホールで実施し、年度によっては、500名を超える観客の前で、本学学生が日頃の英語学習で培った成果を発表する機会となっている。

2018年度の第3回大会には、同年に「海外特別研修」へ参加した学生8名の中から2名が出演し、1名は「レシテーション部門」で、もう1名は「自由スピーチ部門」においてそれぞれ優勝を収めた。また、残り6名のうち、2名がコンテストの司会を務めた。その司会を務めた学生のうちのひとりについては、2018年度の研修における「全体リーダー」の役割を担っており、コンテスト当日、表彰式前の「アトラクション」において、「海外特別研修」に関する感想などを英語で発表するという時間を設けた。それぞれの学生は、自ら積極的にコンテストへ取り組む姿勢を貫き、成果を挙げているという点から、本人たちの努力がまさに結果として現れたと思われる。

こうしたスピーチコンテストを設定することはとても意義深いと考えている。大勢の聴衆の前でスポットライトを浴びながら、基本的には、母語ではない言語を用いて演じるわけである。当然、マイクの前では緊張してしまうかもしれない。それでも、しっかりと練習を重ね、何度も同じことを繰り返し、本番に向かっていくという過程を経ているからこそ、自信をもって発表できるようになると思われる。「海外特別研修」から約2か月後にあるスピーチコンテストが、研修参加者にとって、英語学習や課外活動などに関わるモチベーションを維持する格好の機会になることを願っている。

4.3.2 国際交流の実践

前述のスピーチコンテスト以外にも、「海外特別研修」への参加者などが英語を実践的に使用できる機会を、可能な限り提供できるようにしている。例えば、2018年には、Geoff Lindsey 博士（ロンドン大学 UCL 校 夏季英語音声学セミナー ディレクター）を本学へ招聘し、英語発音に関するワークショップなどを開催し、本学学生が英語という言語を媒介として交流する時間を設けた。その場には、「海外特別

研修」へ参加した学生数名だけでなく、将来、研修への参加を希望する学生なども含まれており、自分たちが今まで習ってきた英語が実際に通用するのかどうかを試す良い機会になったことと思われる。そこで、相手にしっかりと自分が話す英語が通じれば自信となり、通じないということであれば、まだまだということ、さらに学習しなければならないという意欲が湧くであろう。

なお、ワークショップについて、具体的には、Lindsey 博士より、日本語を母語とする話者が苦手とするような英語発音に関して、海外で実際に通じるようにさせるための方法などを詳しく学んだ。ワークショップに参加した学生からは、普段、大学の授業等において聞く英語母語話者の教員が話す英語よりも速度が速かったので驚いたというような感想があり、英語学習に対する刺激になったことと推測している。

Lindsey 博士を今まで本学へ3回(2016年12月、2017年10月、2018年12月)招聘しており、こうした取り組みが継続して行われることによって、「海外特別研修」に参加した学生のみならず、将来的に研修への参加を希望する学生、もしくは今まで英語や海外留学などにあまり興味はなかったけれども、他の学生がしっかりと英語でコミュニケーションをとる姿を見て、「自分も話せるようになりたい」と英語学習等に興味をもち始める学生などへ、効果をもたらす可能性があると考えている。

4.3.3 国際親善学生大使の任命

英語スピーチコンテストや海外研究者などの招聘については、それほど頻繁に行えるものではなく、期間は限定的で年1回くらいしか実施できないであろう。また、ひとたびそうした行事が終われば、その次の目標を失うことさえありえる。そこで、何か継続してできることはないかを模索している中で、筆者が企画や運営等をする本学の「山崎プロジェクト」などにおいて、基本的には、学内のみならず学外の方々からも高く評価をいただくような顕著な功績を挙げており、積極的に国際交流等を推進する役割を果たすことが期待される学生を、「国際親善学生大使」として任命した。2018年度末の時点までで8名の学生を任命しており、その中の2名については、2018年度における「海外特別研修」への参加者である。

学生大使の初仕事として、大使のメンバーは、先に述べた Lindsey 博士との交流を実践した。また、Lindsey 博士を囲んでの昼食会を寿司店にて開催し、地元の名物である海産物を味わいながら、文化交流等にも挑戦する学生大使もいた。

ただし、このように学生大使に任命したのは良いのだけ

れども、何かを継続して定期的実施するのは難しいという状況があるのは事実である。実際、学生には学生の生活があり、授業だけでなく、予習や復習、実験や実習、就職活動、サークル活動、アルバイトなど、数え切れないくらいの「やらなければならないこと」が存在すると思われる。

「山崎プロジェクト」への参加は、基本的に、「強制」ではなく、「自主」的に参加したい学生が、参加したいときに参加するという方針を貫いているため、学生の自主性に委ねられているところが大きい。そのため、ひとつ大きな行事が終われば、達成感などに満たされ、そこで離れてしまうこともありえるため、全員同じメンバーで、数年間にわたり継続して何かを行うのは難しいのかもしれない。

この点は、同様に、「海外特別研修」の「事後研修」における大きな課題でもあると認識している。当然のことではあるが、「海外特別研修」に参加した後、事後研修にわざわざ参加しなくても、自律した学習者として行動する学生もいるかと思われ、一概に「継続性」について問題視することもないと思われるが、一貫した継続指導という観点では、何か対策を講じる必要があるかもしれない。現在、試行的にいろいろと取り組んでいるところである。

参考までに、筆者は、「英語を本気で学習したい」と思う学生を中心として活動する「山崎英語塾」を2016年度より主宰している。この英語塾を、大学における正式な「部活動」や「サークル活動」として扱われるように登録することが、ひとつの解決策になるのではないかという見方があり、そうしたことを希望する学生同士が集まる正規の学生団体となることによって、学生がより主体的に、そして定期的に活動することが期待されるかもしれない。

5. 安全と安心をどのように確保するか

「海外特別研修」を実施する上で、最も慎重になり、最大限配慮していることが「安全と安心の確保」についてである。特に、参加学生が自宅を出発してから、英国へ滞在し、自宅へ戻るまで、一切、事件や事故等に巻き込まれることもなく、無事であることが、最も重要である。しかし、近年、日本のみならず海外においても、痛ましい事件などの報道がなされ、特に海外へ行くことに不安を感じ、渡航を控えるという場合さえもあると思われる。本学の「海外特別研修」では、参加する学生のみならず、保護者や大学の教職員などが関係しており、そうした方々へいかに不安等を感じさせないようにできるかということも重要な点であり、「安全と安心」のためにできる限り取り組むように努力をしている。以下では、それらのことについて主に3つの観点から論述することとする。

5.1 可能な限りの準備等

大学で「海外特別研修」を実施するという点においては、学生が海外へ渡航し、各種プログラムを円滑にこなし、目的を達成した上で、無事に帰ってくるのが求められる。そのため、運営する側が研修全体に関してしっかりと把握している必要がある。

本学の「海外特別研修」は英国・ロンドンを舞台としており、筆者が滞在した経験のある場所ということで、多少は現地の事情などを知っている部分があるかもしれないが、時代の流れの中でそうした情報等を更新する必要がある。また、研修を実施する前に、現地との関係者とのやりとりを含め、さまざまな情報等を入手し、できる限りの調査や準備などを行うことが望ましいと考えている。そうしたことから4つをここで紹介する：(1) 受け入れ先であるロンドン大学側との交渉等；(2) 学生が参加する予定である「夏季英語音声学セミナー」の検討等；(3) 日本の他大学の教員などとの情報交換等；(4) 研修参加者の募集や事前指導などで現地の説明をする際に使用する写真等の準備である。

まず(1)について、実際、関係者と直接的にやりとりするという点には利点が多いと思われる。宿泊場所や料金のこと、費用の支払い方法のことを含め、具体的に相談や条件交渉などをすることは有益であるだろう。

また、(2)に関して、「夏季英語音声学セミナー」についてよく調べ、約2週間にわたるセミナーの全体像を把握するとともに、過去のセミナー資料等を参考にして、本学からの参加学生（主として学部1年次及び2年次生が参加するのではないかと想定している）が、全て英語で行われる専門的な内容の授業にどれだけついていけるのかを見極め、どのようなところで学術的に支援できるのか、出発前の日本で行う事前研修のあり方などについての検討も行うようにしている。

さらに、(3)について、日本の高等教育機関に勤務している教員などとも、可能であれば、留学プログラムなどに関する情報交換等を行うことは有意義であると思われる。特に、研修費用の料金設定や旅行会社に関する情報などが参考になるかもしれない。

そして、(4)であるが、現地に関する写真等の準備は、大いに役立つだろう。これらの写真等は、研修の参加者募集に関する説明会の際に行うプレゼンテーションなどで使用するが、臨場感が伝わり、参加者からはとても好評である。具体的な使用例のひとつを紹介すると、研修の説明会において、夏のロンドンにおける服装に関して、「半袖か、それとも長袖か」ということを尋ねられた際に、現地の様子がわかる写真を提示することにより、参加者はだいたい

のイメージをつかめるようである。

いずれにしても、可能な限りの準備等をしておくことは、学生や保護者、教職員等の関係者からさまざまな説明などを求められた際にも自信をもってほぼ明確に答えることができる部分が多く、「安心」してもらえることにつながり、効果的であると思われる。

5.2 旅行会社の選定

研修を実施する上で重要なことのひとつは、旅行会社選定である。学外に学生を引率するわけであり、有事の際などにもしっかりと対応していただける、信頼できる協力者や協力団体等を慎重に選ばなければならない。本学における「海外特別研修」では、基本的な方針として、複数社の見積りに関する情報等を取得するなどして、費用面における学生側の負担が増えないように最大限努力するだけでなく、対応の迅速さなどを含め、さまざまな観点に着目して、ご協力いただく旅行会社を1社に絞るように努力している。

そうした中、特に重要視しているのが「受注型企画旅行」の契約ができるかどうかである。基本的に旅行契約形態は、「募集型企画旅行」、「受注型企画旅行」、「手配旅行」の3つに分類される。海外留学生安全対策協議会 (n.d.) によれば、「旅行形態によりその責任範囲が異なり」、具体的に、「手配旅行」では「研修・留学中の責任・対応は全て企画した学校にあり」、「募集型企画旅行」及び「受注型企画旅行」では、旅行会社側が「旅程管理責任、旅程保証責任、特別保証責任」を負うとのことである。

実際、「募集型企画旅行」については、旅行会社の店頭に置かれているパンフレットに記載のパッケージツアーなどが基本的にはこれに該当するのではないだろうか。

一般的に、大学等が主体となって募集する海外研修などでは、「受注型企画旅行」もしくは「手配旅行」を選択するのが主流になっている印象はあるが、古川 (2018) によれば、「参加者本人（学生）及び保護者にとって、実施が限定される募集型企画旅行を除くと、BtoBであってもなくても受注型企画旅行で参加するのが安全性を考慮すると有利になることになり、また学校にとってもリスクを一定程度旅行会社に移転することができるので受注型企画旅行契約が有利である」(pp.55-56) としている。

本学の「海外特別研修」では、当初から「手配旅行」ではなく「受注型企画旅行」での契約を実施の条件として掲げており、安全に対する配慮等をするように努めてきた。加えて、2回目の実施となる2018年度については、学生の参加人数が前年の3名から8名に増えた関係で、旅行会社の社員でもある添乗員の方に同行していただいた。これにより、参加学生8名と引率教員1名、そして、添乗員1名

を含めた合計 10 名で研修を実施できたことは、安全や安心を確保する上でも意味があったと思われる。万が一に備えて、学生以外に引率教員と添乗員がいるということで、初めて海外へ行く学生だけでなく、保護者等にとっても不安が軽減されたのではないかとと思われる。

いずれにしても、旅行会社の選定時におけるポイントとして、以下の主に 5 点が挙げられるだろう：(1) 受注型企画旅行で契約できること；(2) 参加者の人数が相対的に多くなる場合には、添乗員による協力等を得ることができること；(3) 担当者と対面にて直接的な交渉や打合せなどが可能な限り迅速にできること（状況によっては、参加費用の支払いや保険のことなどで、旅行会社の担当者が参加学生や保護者等と直接やりとりすることがあるかもしれない）；(4) 学生にとって良心的な費用設定になっていること；(5) 最後まで責任をもって誠心誠意のご対応をいただけるということである。

5.3 安全危機管理等への取り組み

基本的に、海外では、文化や風習、言葉など、あらゆる面で異なることが多く、日本に生活しているときと同じ感覚で何でも行うことを避けるほうが良いという場合もある。そのため、危機意識等を醸成し、日本を離れた海外で安全に過ごすためにはどのようにすれば良いかについて考える機会が必要であると思われる。

そこで、本学の「海外特別研修」では、学内にて、「安全危機管理」に関する講習会を 2017 年、2018 年、2019 年の各年度において、英国へ渡航する前に、研修へ参加する全ての学生を対象に実施している。内容としては、(1) 日本の外務省が発行する『海外安全 虎の巻』（この冊子では、海外渡航中、現地でトラブルなどにどのようにして巻き込まれないようにするかということや、実際、事件や事故等に遭遇してしまった場合にどのように対処するかということなどについて紹介されている）や、(2) 同省の『海外安全ホームページ』（最新の現地に関する情報などが国や地域ごとに掲載されている）に記載されていることをひととおり扱うだけでなく、(3) 筆者が 2017 年度に参加した、旅行会社等が主催する海外留学や研修における危機管理と安全対策に関するセミナーで得られた知見なども生かしている。このような取り組みの後、学生の安全等に対する意識が変わっていくように見受けられることから、こうした一連の「安全危機管理」に関する啓蒙活動などは、多少なりとも効果をもたらす可能性があるのではないかと推測している。

なお、講習会だけでなく、研修参加者には、事前研修における初期の段階から日本と海外との違い等について意識

をしてもらい、自分で自分の身を守るなどについて注意喚起をする必要があるだろう。例えば、学生食堂などで席を陣取るために自分の荷物を置いたまま座席を離れる行為というのは、問題がないと言えるのだろうか。ひとつひとつの事例をしっかりと考えてもらい、貴重品の管理等を含め、日本との違いなどをしっかりと認識してもらうことが重要であろう。

そして、海外への出発前に行われる最後の事前研修において、安全危機管理等に関する「まとめ」の時間を設けることが望ましいと思われる。本学の「海外特別研修」に関して、出発する少し前には学内の期末試験などがある関係で、学生は相当忙しい状況となり、一時的に事前研修を中断する必要がある。そのため、基本的には、出発直前に、日程や持ち物などの最終確認等を行うため、事前研修の最終回を実施することになっている。その際に、どのように自分の身を守り、暮らし慣れた日本を離れ、海外でいかに安全に過ごすことができるのかということ、一緒に行く仲間たちとともに改めて深く考えるという時間を設けている。

こうしたさまざまな取り組みを継続的に実施することにより、日本とは異なる場所で生活する心構えなどができることを期待している。

6. まとめ

以上、大学における海外研修のあり方に関して考察した結果、以下に挙げるのが、主として重要もしくは配慮等が必要になるのではないかと考える。

- (1) 学生の満足度に影響する可能性があること
 - ・ 行き先の選定
 - ・ 主たる研修目的の設定
 - ・ 現地での観光や異文化体験等の位置付け
- (2) 本来の目的達成に影響する可能性があること

【事前研修において】

- ・ 目標言語（英語）の学習
- ・ 専門的な内容の予習
- ・ 人間関係の構築

【本番（現地プログラム）において】

- ・ 学業面での支援
- ・ 観光面における要望等への対応
- ・ 語学面での追加指導

【事後研修において】

- ・ 英語スピーチコンテストでの発表
- ・ 国際交流の実践
- ・ 国際親善学生大使の任命

- (3) 安全と安心の確保に影響する可能性があること

- ・ 可能な限りの準備等
- ・ 旅行会社の選定
- ・ 安全危機管理等への取り組み

実際のところ、海外研修などを実施するためには、相当な時間や労力などが必要になることは言うまでもないだろう。そうしたことを覚悟の上で、できる限りの準備等を行うことが求められる。本論文では、筆者が勤務する大学で実際に行われている「海外特別研修」における事例等を参考に、あるひとつの見方として、海外研修のあり方について示しているため、ここで述べられていることがそのまま手引書のような役割を果たすということではないと思われる。実際は、それぞれが置かれた環境や条件などの中で、各機関等のやり方で、できる範囲での実施にならざるを得ないところはあるのではないだろうか。いずれにしても、参加する学生が心から満足でき、異文化理解等が促進され、安全と安心への配慮がなされた、効果的な留学プログラムがさらに活発に実施されることを期待するものである。

引用・参考文献

- 大西好宣 (2018). 「グローバル人材と留学—学生を海外に派遣するその前に—」 ウェブマガジン『留学交流』2018年8月号, Vol.89, pp.11-22.
https://www.jasso.go.jp/ryugaku/related/kouryu/2018/_icsFiles/afieldfile/2018/08/08/201808onishiyoshinobu.pdf
 (参照 2019年1月20日).
- 海外留学生安全対策協議会 (n.d.). 「派遣留学・海外研修と旅行業法」 特定非営利活動法人 海外留学生安全対策協議会.
https://www.jcsos.org/support_a.html
 (参照 2019年3月29日).
- 外務省 (2018). 「外務省 海外安全ホームページ『英国』」 外務省.
https://www.anzen.mofa.go.jp/info/pcinfectionsपोthazardinfo_154.html#ad-image-0 (参照 2020年1月9日).
- 外務省 (2019). 「海外安全 虎の巻〜海外旅行のトラブル回避マニュアル〜『第18版』」 外務省.
<https://www.anzen.mofa.go.jp/pamph/pdf/toranomaki.pdf>
 (参照 2020年1月9日).
- 日本英語検定協会 (n.d.). 「オーバーオール・バンド・スコア」 公益財団法人 日本英語検定協会.
<https://www.eiken.or.jp/ielts/result/pdf/interpretation-of-ielts-band-scores-j.pdf> (参照 2020年1月4日).
- 古川彰洋 (2018). 「学校法人が実施する中長期留学や海外研修旅行の海外受注型企画旅行契約における旅行業法上の安全配慮義務の課題について—より安全なグローバル教育旅行のために—」 『日本国際観光学会論文集』 第25号, pp.51-59.
http://www.jafit.jp/thesis/pdf/18_06.pdf
 (参照 2019年3月29日).
- 山内ひさ子 (2015). 「短期海外研修の効果を上げるための取組—長崎県立大学国際情報学部国際交流学科の場合—」 ウェブマガジン『留学交流』2015年4月号, Vol.49, pp.1-11.
https://www.jasso.go.jp/ryugaku/related/kouryu/2015/_icsFiles/afieldfile/2015/11/18/201504yamauchihisako.pdf
 (参照 2019年1月19日).
- 山崎大介 (2018). 『富山県立大学 山崎プロジェクト 成果報告書 2018年度版』 富山県立大学 山崎プロジェクト, 40ページ.
- 山崎大介 (2019). 『富山県立大学 山崎プロジェクト 成果報告書 2019年度版』 富山県立大学 山崎プロジェクト, 50ページ.
- MIT Admissions (n.d.). "Competitive scores", Massachusetts Institute of Technology.
<https://mitadmissions.org/apply/firstyear/tests-scores/>
 (参照 2020年1月4日).
- UCL Psychology and Language Sciences (2019). "Admissions requirements", University College London.
<https://www.ucl.ac.uk/pals/study/continuing-professional-development/continuing-professional-development-cpd-course-programme-5> (参照 2020年1月4日).

謝辞

本論で述べられている「海外特別研修」を実施するに当たり、多くの方々や機関などより、ご理解、ご協力等を頂戴した。関係各方面の皆様方に心より厚く御礼を申し上げる次第である。

An Empirical Perspective on the Implementation of a Study-Abroad Programme in Tertiary Institutions

Daisuke YAMAZAKI

Centre for Liberal Arts and Sciences, Faculty of Engineering

Abstract:

This paper aims to examine the implementation of a study-abroad programme in tertiary institutions, referring to the Special Study-Abroad Programme (destination: London in the United Kingdom) administered at Toyama Prefectural University in Japan. In particular, the principal focus is placed on the following aspects: (1) how to satisfy the participating students; (2) how to achieve the intended purposes; and (3) how to ensure safety and security. In conclusion, concerning (1), it seems that the satisfaction level of the participating students would be affected by the following factors: the destination, the purposes of a programme, and how to arrange cross-cultural experiences and sightseeing in the travel itinerary. With regard to (2), before the trip, it is necessary to make an attempt to enhance language skills and expert knowledge, and to establish a sound rapport among the participants. During the stay abroad, it is essential to conduct some supplementary lessons based on the learning insecurities of students in the target language and other subjects related to the programme that they attend. In addition, responding to their requests on what they want to do in their free time as much as possible is also likely to be crucial. After returning home, providing an opportunity to utilise their target language in everyday life and to experience international exchanges can lead to the maintenance of their positive motivation. As for (3), making possible preparations for the trip and selecting a reliable travel agency which provides its customers with genuine support could be indispensable in order to maintain safety and security. In any case, it is hoped that organisers of a study-abroad programme would make every endeavour to create varied and stimulating contents which satisfy the participating students as a whole.

Key Words: study-abroad programme, tertiary institution, student satisfaction, intended purpose, safety and security